

言葉マップを読解のまとめの活動に取り入れる (2)

長岡市立与板小学校 教諭 平松 寛隆

1 単元設定の意図

先のレポートの続編となる。言葉マップを使った6年生の物語教材「山へ行く牛」の実践である。言葉マップを利用することで、読み取ったことが視覚的にあらわされる。そこから、人物の関係が分かり、作者の意図した物語の構成が伝わってくる。そのような言葉マップを、私は積極的に「読む活動」に取り入れていきたいと考えている。

「山へ行く牛」では、「島子と父との別れ」と、「母牛と子牛との別れ」とが絡み合う。主人公の島子が母牛の姿を見て初めて、自分を残していった父の気持ちに思いを馳せる。その複雑な構造を読み取る上で、言葉マップが必要となる。

昨年の実践では、読み取ったことをまとめることにとどまっていた言葉マップであったが、今年は、読み取ったことを書き入れていき、そこから新たな発見をふまえて読むことにより、物語をとらえ直すことができた。

2 実践の概要

①単元名 心を見つめて「山へ行く牛」(小学6年生)

②単元のねらい

◎状況や人物の立場から心情を想像しながら読み味わうことができる。

③手だて

◎読み取った人物の関係を言葉マップに表し、去っていく者と残される者との共通点を見出させ、去る者と残されるものという視点で物語を捉えさせる。

④学習計画

次・時数	学習内容	教師の支援
第1次 ②	通読し、語句の意味を調べ、初発の感想を書く。	CDを使用する。
第2次 ⑤	場面のあらすじを追い、場面ごとの島子の気持ちを考える。 島子の気持ちについて意見交流し、深める。	ワークシートを使用する。 島子の気持ちは、ノートに吹き出しを書かせる。
第3次 ②	言葉マップで、別れが錯綜する物語を捉え直す。 まとめの感想を書く。	言葉マップのワークシート

⑤言葉マップ「山へ行く牛」に記述してほしい内容

子どもたちは、言葉マップに読み取ったことを書き入れることで、このような構造を発見していくと私は考えた。作者の意図が分かったとき、一つ一つの描写が子どもたちの読む味わいにつながる。それは、子どもたちに文学作品を読む楽しさを教えてくれると考えたのである。

次のように読み取らせたいことを整理した。

- ・島子と子牛を重ねて見てみると、子牛に対しての鼻木入れは「元服」であったり、「一人前になる」ためであったり、「そばに親がおらんようになって、独りでちゃんとやっぴいかんらん」ためであったりする。
- ・父と島子・母牛と子牛の関係を重ねて見てみると、父は戦争というどうすることもできない状況で出征していく。母牛は山行きで連れられていく。「父は初めてぐちをこぼした」と「母牛は、なかなか歩き出そうとはしなかった」親としても二度と会えないかもしれない状況での出発を同じように描いている。

